「人間の心を知っておられる」　2018年02月06日

ヨハネによる福音書2章23節～25節　イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、人間についてだれからも証ししてもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。

主イエスは過越祭の間、エルサレムに滞在された。その間、なさった徴を見て、多くの人が主イエスを信じたという。ヨハネ福音書では、主イエスのなさった徴はこれまで、カナでの婚礼で水をぶどう酒に変えたという奇跡であるが、この奇跡を知っていたのは召使たちで、他の人々は知らないことであった。次のエルサレム神殿での暴利を貪る商人たちへの暴力的な振る舞いは、民衆の強い賛意を得たであろう。自分たちが言えないことを、鮮やかに代弁してくれたと喜んだに違いない。それ以外の徴は記していない。神殿で、他の力ある徴を行ったのであろうか､主イエスを信じたと書いている｡ところが主イエスは、彼らの信仰を信用されなかった。その理由は、人間について誰からも教えてもらう必要がないほど、人間の心の中にあるものを知っておられたからである。

ヨハネ福音書は、神は主イエスを遣わして、この世、人間を愛していると伝えることが主題であるが、同時に、人間の心の中には、神の愛を信じることができない罪と不信仰が満ちているということも、上記のみ言葉のように、繰り返し書いている。

日本語で「心」という言葉は美しい、良いものという響きがあるが、聖書では必ずしもそうではない。マルコ福音書7章6節bで、主イエスは、イザヤの言葉を引用し「この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている」と語っている。使徒言行録5章3節で、ペトロは、代金をごまかして献金したアナニアに、「なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか」と叱責している。ローマ書2章21節で、パウロは、人類の罪を指摘し、「なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです」と書いている。人間の心は善にも悪にも向かう不確かなものであり、主イエスは、そのことを知っておられると述べている。

上記のみ言葉には「信じる」と「知る」という言葉が使われている。これらの言葉はヨハネ福音書では重要な意味を持っている。「信じる」というギリシア語はピスチュウエインで、ヨハネ福音書で98回、使われている。このピスチュウエインは静止的であるというより行動的な「従う」という面を強く持っている。信じることは行いへと突き動かすということである。パウロがローマ書10章10節で「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」と書いているように、信仰は告白へと連動するのである。

「知る」という言葉はギノスケインとオイダという語で、ヨハネ福音書にギノスケインは56回、オイダは85回と、圧倒的に多く使われている。「知る」は識別することでもあるが、ヨハネ福音書では「知る」を「信じる」と同義語として用いているケースが多い。「信じる」「知る」は主イエスとの人格的な関わりを指す重要な言葉で、逆に、信じない、知らないは決定的な断絶を意味している。このことを踏まえて、ヨハネ福音書を読んでいきたいと思う。